

# 緑雨の一書簡をめぐって

池田一彦

ここに昨年、筑摩書房の『斎藤緑雨全集』編集のため、私に某古書店より入手した一通の緑雨書簡がある。大阪の渡辺霞亭（1887-1926）宛のもので、封筒欠だが内容・日付等から明治二十四年五月十九日のものと判明する。当時、新聞『国会』に寄って文学的活動を始めたばかりの頃のもので、その前後の批評活動をうかがい知る上でも好箇の側面的資料と思われるので以下に紹介する次第である。（尚、翻刻に際しては、できる限り原物の体裁をそこなわぬよう、改行、「ニ」「ハ」などの片仮名表記に限り、そのままの形で提供する方針を採った。）

拝啓

浪花瀉面白く拝見す

善悪ともとの御言葉ニよりまんまと

悪の方相認め候 本日発行の国会新聞

御覽下されたし

御氣ニさへられな こわい〜

天囚氏の発行辞 いさましけれど末の二行ハ

間違ひなるべし 「人を導き世を諭す」が

文学の目的にあらず

天目山もよし 勝頼の最期と小宮山内膳の働

きとに今すこし力を加へなバ猶よからん 正太夫

ハ歴史的小説を喜べども 小説的歴史を喜ばず

朋輩の翻訳振り幼きニハ閉口なり 冷奴ひやっこといふものも

醤油がなくてハ食へぬことを承知せられたし

苔の花ハまづ出来た方なり されど小草を義婦

として書きたることニ付てハ大議論あり 柳の枝を

吹くの風ハ興あれども柳の上か下かを吹く

風ハ柳を吹くの風とハ言難し

有馬紀行 いはぬが花よ

阿琴も閉口なり 愁歎が長くとも

深ければ差支無けれど阿琴の愁歎ハ浅くして長いのだ

から困る、或物ニ広からんよりハ深からんことを

正太夫ハ望む、あのやうな書ツ放しハつゝしむ

べし シカシ主人の今迄ニ比すれハ角の取れたハ

大いニよし

引たりくハ 何が美だかわからぬ殊ニ其二

の如きハ尾籠千万

天目山 苔の花 阿琴等 悲哀を叙したるもの

所謂涙主眼ばかりをあつめたハどういふ都合にや

此次よりモット取合せニ氣をつけられたし

兎ニ角思立ちハ殊勝なり あきずニ遣つて

くれたまへ

さてこれからが自分の事

御尋の資朝ハいつまでたつてもよろし シカシ此頃ハ

信仰とハいはぬ 愛慕といふ

東京の小説家だんくぼろが現はれ昨今ハ奇

談続出 書くニ忍びず

其おもなる目的ハ 女ニほれられたいばかり 自称

丹次郎が殖ゑてく 硯友社党の如きハ皆それ  
なり

正太夫曰く ほれられんと欲せバおのれ先づほれねバ

ダメなり シカシ本当ニほれてハいけない ほれた

ふりをせよ 此ふりの巧拙ニ由て丹次郎と否とを

判つべしと、されども皆耳ニ入らず たゞく色海の

迷津ニ小説家自身が飛び込んでゐる容子

笑正の極なり

多寡の知れた金を遣つて一度遊ベバ最早通だと心得

或人の如きハ芳原ニタツタ二度行きて四十八手をかきたしとい

ひ

洲崎へ一度行きて総離が書きたいと言ひ居れり

而してそれらの小説家ハ正太夫を遊ばぬ男として

暗ニ嘲けつて居る あはれむべしく

正太夫某小説家ニ語けて曰く 一年ニ千円づゝ遣つて

三年遊ベ それでヤット女的美醜を判断することが出来るなら

んと

某小説家曰く そんなことをいふから正太夫ハ俗なり

硯友社党ハ一夜ニ拾田遣つたことなし それ以上

の遊びハ入らぬことなりと 正太夫曰く それだから

羽織の裏へ命といふ字を書いて喜んでゐるのなりと

スコシ腹が立ちたれバ 是れ見よと正太夫前年の

各所の勘定書を出す山の如し 某小説家おどろいて

逃出す 愉快なりし

此塩梅なれば今日の小説家が觀察の及ぶ所ハ知れたものなり

恐るゝニ足らず

縁日で女の服粧を知り寄席で遊女屋を知り

絵入新聞で芸妓の情態を知り芝居で人情を

知つたのが今の小説家なり 彼等歳三十を越ゆるとも

何程のことかあらん 第二の魯文第二の文京が出来

るだけなり 貴兄其つもりで勉めよ

正太夫も緑雨もこれより大いニ奮つて彼等

を衝いて、衝破るべしと決心せり 今日以後

の正太夫と緑雨とを御覧下されたし

小説家でハ逍遙<sup>マヤ</sup>鷗外露伴 批評家でハ

不知庵 これだけが曲者<sup>くせもの</sup>なるのみ

近日文学世界第六号として拙者作のもの出る

先月書いたものなれど木板彫刻のためおくれれてゐる

随分と馬鹿にしきつて書いたつもり 出板の上

ハ一部差出す 精々<sup>ま、ま、</sup>悪評を玉へ

逢へバ面白い話がいくらかもある ダカラ東京へ

一寸来たまへ 手紙でハこれぎり あとハ其内

十九日 正太夫

霞亭盟契

内容は、前半の『なにはがた』批評と後半の現今小説家批判（又は硯友社批判及び色道論）とに大きく二分される。具体的には「さてこれからが自分の事」云々以下が後半と見做されるのである。

まず前半部について、『なにはがた』は、明治二十四年四月二十六日より刊行された浪華文学会の機関紙<sup>註</sup>で、第一冊の目録は次の如くであった。

天目山 (完) 西村天囚

朋輩 (完) 長野圭円

苔の花 (完) 本吉欠伸

有馬紀行 (完) 樟廼舎主人

阿琴 (完) 渡辺霞亭

引たり、 (完) 岡野半牧

実際には、冒頭に天囚居士の「発行辞」<sup>はつかうのことば</sup>が添えられているが、緑雨の霞亭宛書簡はこの第一冊をとらえての批評から始まっている。

「本日発行の国会新聞」とあるのは、明治二十四年五月十九日発行

の『国会』の事で、同紙には末尾に「花のお江戸 正直正太夫」の署名で「月の浪花文学协会会员諸君」の宛名のある無題の書簡体の文章が掲げられている。文中には「貴会員霞亭ぬしの書に曰く」云々と霞亭が緑雨に『なにはがた』第一冊を寄贈するにあたっての書簡の一節も引用されており、『なにはがた』若しくは「浪花文学会」と緑雨との関係が、主として渡辺霞亭を介して為されたものであったことが窺い知られる。霞亭は当時（明治二十三年六月以降）『大阪朝日新聞』に寄って健筆を揮っていたが、それ以前は『東京朝日新聞』の前身である『燈新聞』『めさまし新聞』等に在社しており、緑雨とは旧知の間柄であった。<sup>注2</sup>

書簡中に述べられている『なにはがた』批評は、やがて第三冊までが出揃った時点で「『浪花瀉』一二三」（『国会』明治二十四年七月二十一日〜二十三日）として公けにされることになるが、基本的には字句・内容ともに当書簡中の批評と一致する。一例を挙げれば「天目山」の評は「浪花瀉一二三」ではこうなっている。

天目山（天囚） 題の通り武田一門の没落を叙したる歴史的小説か小説的歴史か当るなら当て、見たまへと作者が断り書を添た訳ではなし、可もなく不可もなく善くもなく悪くもなく至極中庸を得たものかと云へばモソツト利いてもいいとは辛子味噌の話で天目山の評にはあらず小宮山内膳の始めはよきも終りに

今一息の力を入れたしと云ふ者あれど今時彼是云つた所が天正十年春二月死んだ勝頼が復活きるでもなければ内膳も配膳も何れ都合次第にすべし。（傍点筆者）

だが、われわれは私的書簡に記された評とのちに公けにされた評と「基本的には」一致すると述べてただ済ませるわけにはゆくまい。実際、興味が持てるのは、両者の微妙な落差・差異だからである。書簡での「勝頼の最期」の一項がそっくり欠けているというようなこともあるが、ここではむしろ傍点を付したような皮肉な冗語を用いた表現に注目すべきである。作品への評語を素直に連ねるように見せかけて絶えずその評語自体から逸脱していく（或いは否定的に迂回を重ねていく）論法。「内膳」と「配膳」の洒落に「何れ都合次第にすべし」と切って捨てるが如き「ちやかし」の姿勢。それらの背後には、緑雨の文学批評に一貫した、「何を」よりも「如何に」表現するかを重視する特質が認められる。いかに読者の面白く読める批評を書くか、批評の表現への飽くなき追究、その一端が右の一事からも窺えないだろうか。<sup>注3</sup>

他に書簡での評と「浪花瀉一二三」を比較して気をつく点として、書簡の方の「苔の花」評での「大議論」と作品全体の「所謂涙主眼ばかり」をあつめた観のある「取合せ」に関する言が、後者においては割愛されていることを挙げておく。

後半部。初めの「御尋の資朝」云々は未詳。のちに時代物でも名

をはせた霞亭のことゆえ、日野資朝を題材とした作の構想でもあつて、緑雨が『国会』に寄稿を依頼していたものと考えられなくもないが、確定はできない。「信仰」「愛慕」についても同様。以下、「東京の小説家」についての楽屋裏話めいたものが続くが、批判的は主として「硯友社党」の面々であり、色道に関する造詣の浅さ(?)を自説を開陳しつつさんざんに詰っている。自身は「色海の迷津」から自由であるとの自負——自身は「通」であるとの自負がそこには読み取れる。のちに緑雨が自作『かくれんぼ』について語った談話中の「『かくれんぼ』は少くとも、三四千の金を空に棄たた奴でなくてはわからぬ、金持が金を使ふのは何でもないけれど、無い金を三四千も遣ふと、少しは世間が見えてくる」云々の言と、書簡中の「一年二千円づゝ遣つて三年遊べ」云々の言の符合が興味を引く。「羽織の裏へ命といふ字を」云々は、書簡より約ひと月前、硯友社の堀紫山に反駁した「聴けや紫子」(『読売新聞』明治二十四年四月七日)中に引用のある、硯友社の芝居興行を諷した自らの言「硯友社員は檜笠でござるの羽織の裏に命でござるのと種々装束に気をもむとのことなるが着附に気をもむは役者も同じ事なり白粉塗った小説家も妙ならん檜笠を冠るのが雅ならば雅は誰にでも出来る」をそのまま受けている。「緑日で女の服粧を知り」云々も前年の著

名な戯評「小説評註問答」(『読売新聞』明治二十三年三月二十三日(二十八日)の「或者が小説家の腹を割いて世態を寄席に聴き風俗を縁日に察し人情を芝居に観ると申しゝは余りの事なれども(中略)現今大家と呼ばれ玉ふ方々は一二の返り咲を除くの外概するにお歳若し」云々の言の変奏である。

続けて「正太夫も緑雨もこれより大いニ奮つて」以下の一節は、緑雨の最も充実した文学活動期であると認められる『国会』時代(明治二十四年四月(二十六年一月)のいよいよこれから始まる時期であつてみれば、現実味のある当時の緑雨の抱負として受け取つてよい。実際書簡末尾でも触れられている『かくれんぼ』を脱稿して間もなくのことであり、又この月末より『油地獄』を匿名連載し始めたことや、一方の批評でも少しあとのことではあるが「荊鞭」のあることを思えば、相当に氣の入っていた時期であつたらうと想像できるのである。だが、総体に霞亭への激励・忠告の色彩の強いこの亭宛書簡の最も注目すべきは、

小説家でハ逍遙鷗外露伴 批評家でハ

不知庵 これだけが曲者なるのみ

の二行であろう。

約一年後の「『しがらみ草紙』を読む」(『国会』明治二十五年四月二十一日)で「鷗外氏と逍遙氏とは今の文壇において宜くわれ

らの先輩として敬すべきなりとは不知庵も言ひし如く予もつねく言ひぬ」と述べ、約八年後の「日用帳」で「尠すくなからぬ益をわれの受けしは、坪内氏と幸田氏と森氏となり」と述べている。緑雨が、当時の文壇で重きをおいた文学者として「小説家でハ逍遥ウツロウ鷗外ウヅマキ露伴」と三者並べているのは当然のこととして（俗に「紅露追鷗」と呼ばれる尾崎紅葉が抜かされているのは、紅葉が先の「硯友社党」の領袖であったことからこれまた当然のことと言える）、「批評家でハ不知庵」と明言しているのが面白いのである。かつて「評註端唄文学」（明治二十四年一月稿）の中で内田不知庵を取り挙げたこともある緑雨であるが、当時一般に批評家としては逍遥、鷗外を除くならば石橋忍月も謫天情仙（野口寧斎）もいた註ので、その中からとりわけ不知庵を指名していること、緑雨が明治二十四年五月のこの時期には少なくとも批評家として不知庵を高く評価していたことがこれによって知られるのである。緑雨と不知庵とは、『国会』創刊前後よりのつき合いであったことが不知庵改め魯庵の『おもひ出す人々』（大正十四年六月刊）によって知られているが、いわば不知庵は批評家緑雨の眼鏡にかなった存在だったのである。「これだけが曲者なるのみ」という緑雨の断言には、これが霞亭へ宛てての私的書簡であるだけにかえって、当時の緑雨の本音が籠められていると見るべきではなからうか。註

以上、霞亭宛緑雨書簡を紹介し、併せて若干の注釈的解説を加えてきた。緑雨の『国会』時代を考えるに何らかの参考ともなれば幸甚である。

#### 注

- 1 詳細は『日本近代文学大事典』第五卷（昭和五十二年十一月刊）の記述（執筆担当は高松敏男）を参照されたい。
- 2 緑雨は明治二十四年三月二十二日の「御挨拶まで如斯候」（『読売新聞』）中にも霞亭より寄せられた一句を引用している。又、緑雨『国会』解雇のみぎり、逸早く書面をもってその旨告げ知らせてきたのも霞亭であった（「天外君と僕とに就いて」、『読売新聞』明治三十四年一月二十七日～二月七日参照）。
- 3 霞亭の「阿琴」に対する「広からんよりハ深からんことを」云々の箇所も「浪花瀉一二三」では「懐剣を以て一突に突くと大刀を以て鋸引きにするもまだ切れぬとは何れか優れるや」といった比喩的表現に置き換えられている。
- 4 『新著月刊』第二、四号（明治三十年五、七月刊）に掲載の「斎藤緑雨氏が『かくれんぼ』の由来及び色道論、恋愛論等」並びに「斎藤緑雨氏が小説の由来及作に関する逸話」。『唾玉

集』(明治二十九年九月刊)所収。

5 緑雨の「『亜細亜』の批評家」(『国会』明治二十四年十月二十一日〜二十七日)には、

予の知る所にては鷗外氏の『柵草紙』は不知庵、忍月、  
謫天を今の三批評家といひ逍遙氏の『梓神子』は鷗外、  
忍月、不知庵を今の三批評家といふものゝ如し予は今の  
ありさまにてはトテモのことに此五氏、鷗外、逍遙、不  
知庵、忍月、謫天を引包めて五批評家(間ながら五批評  
家に告ぐ、音御批評家に通ずと)と云はんと欲す  
とある。

6 もっとも不知庵に関しては、明治二十三年十一月十五日の  
『大同新聞』に載せた「露小袖を読みて」の中で「尚ほ一言  
す不知庵は観念学士なり」の言があり、又明治二十九年四月  
二十一日(推定)の鷗外宛書簡(『玫瑰珠』第三輯、大正十  
四年十月 所収)には「『明治評論』ニ水谷不倒トイフ人不  
知庵ヲ忍月ヨリエラシトヤウニ申候ヲヨミテ 不知庵を名さ  
へ不倒(不当)の買被り四十面して世間水谷」と逆に忍月を  
評価したような文面も見えるので、注意を促しておく。

——一九九〇・一一・一一——